

作物名：きゅうり

病害虫名：キュウリ黄化病(Beet pseudo yellows virus: BPYV)



写真1 葉の黄化症状



写真2 全身症状

1 被害の特徴と診断のポイント

- はじめ葉脈間に無数の黄緑色の小斑点を生じ、進行すると葉脈を残して黄化する。葉ははじめ生気を失い、晴天の日中には萎凋するが、朝夕や曇雨天日には回復する。これを繰り返して下葉から徐々に枯れ上がる。
- 病徴が進行すると、葉縁が下方に巻き込み硬化してくる。
- 症状が株全体に及ぶと、側枝の発生が悪くなり、草勢の低下により減収や曲がり果の原因となる。

2 伝染源・伝染方法

- 本病は BPYV を保毒したオンシツコナジラミによって媒介される。
- 感染植物を吸汁することによりウイルスを保毒し、5～6日間ウイルスを伝搬する。(半永続伝搬)

3 発病しやすい条件

- オンシツコナジラミによって媒介されるため、増殖に好適である 23℃～28℃で発生が多くなる。

4 防除方法

(1) 発生が確認された場合

- 本ウイルスの媒介虫であるオンシツコナジラミの防除を徹底する。
- 罹病株は伝染源になるので、見つけ次第抜き取り、土中深く埋めるなど適切に処分する。
- ほ場内外の雑草は BPYV の宿主となるため、除草を行い、環境整備に努める。
- 施設開口部を寒冷紗や防虫ネットで被覆し、オンシツコナジラミの侵入を防ぐ。

(2) 次作に向けて

- 栽培終了後は施設を密閉し、オンシツコナジラミを死滅させ、施設外への分散を防ぐ。

5 その他

- 本県においてキュウリ黄化病は 2005 年に確認された。それ以前から同様の症状が認められていたが、ウイルスの検出が困難であったため同定には至っていなかった。

6 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大事典（全国農村教育協会）
- 原色 野菜 病害虫百科2（農山漁村文化協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）